

主な内容

- 巻頭言——— 副学長就任のご挨拶
中尊寺ハスが寄贈されました
- 特 集——— エネルギーセンターの概要
熊本地震における災害支援活動について
平成28年度事業計画
- フリーページ——— すこやかスポット医学講座No.66
「黄斑疾患とその治療」



副学長就任の ご挨拶



小林 誠一郎 副学長

(総務・岩手県高度救命救急センター担当)

この度、4月1日付で副学長を拝命致しました。身に余る重責ではございますが、様々な問題の改善と全体の調和を旨として着実に歩みを進めたいと思っております。

思い起こせば、副院長、院長、医学部長として、長らく病院および学部運営に携わってまいりました。病院運営においては、DPCの導入、診療録の中央化、クリニカルパスの導入、医療材料の見直し、医療安全・感染対策の拡充等々を経験し、幸いにも職員の皆様の並々ならぬご協力をいただき、大過なく運営してこられたような気がしております。

また、医学部の運営においては、教育、研究に関わる改変が主要な課題であったかと思えます。学生の学力向上に関しては、教務委員会を始め、多方面からのご協力をいただき、様々な施策の実施に至りましたが、まだまだ不十分である段階で次にバトンタッチをせざるをえない状況で本当に申し訳なく思っております。そして、研究面では震災を境として、幾つかの大型研究費が獲得され、それぞれの成果が出つつあるのではなかろうかと思えます。しかし、補助事業期間終了後の事業継続については今後とも大きな課題です。成果の達成と共に経済的負担の軽減をも踏まえ、バランスの良い運営を補助金交付当初からの計画に含めて検討すべきであったと思われ、大きな反省材料です。

さて、本学の現在の状況は移転をひかえ誠に厳しいものがございます。適確に情勢の変化を踏まえ、社会通念に基づく具体的な計画の立案・実施により実りある成果に結び付けなければなりません。換言すれば、今後3年および新病院移転後の2-3年は、大学の命運を左右する大きな変革の時期とも言えましょう。本学のモットーである良い医療の提供、そしてそのための教育と研究の発展を目指すためには、経済的基盤を踏まえた確実な歩みこそが必須の要件であることを確認し、様々な問題に対し、ある場合は上下を問わず対峙する必要性が生じてくるかもしれません。しかし、現場主義を徹底し、経験則に基づく的確で妥当な判断に帰結するようがんばりたいと思っております。

教職員の皆様には、今後とも継続したご協力、ご指導、ご鞭撻を切にお願い申し上げ就任のご挨拶とさせていただきます。

酒井 明夫 副学長

(岩手県こころのケアセンター・岩手看護短期大学担当)

本年3月に神経精神科学講座を定年退職したのち、4月から副学長を拝命することとなりました。責任の重さに身の引き締まる思いであります。担当業務は岩手県こころのケアセンターと岩手看護短期大学です。

前者は5年前の東日本大震災・津波後に岩手県から岩手医大に委託されて開所し、内丸の岩手医大内に中央センター、久慈、宮古、釜石、大船渡にそれぞれ地域センターを持ってこころのケアを継続しています。スタッフは医師、精神保健福祉士、保健師、臨床心理士、事務担当などからなる多職種チームで、協力して業務を遂行しています。それに加え、センターには全国80の医学部精神科担当教授で構成される精神科講座担当者会議から毎週精神科医が2名ずつ派遣され、センタースタッフとともに沿岸に赴いて仮設住宅などへの訪問診療や相談所での相談業務に当たっています。また、やはり県から岩手医大に委託され、矢巾でクリニックを開所し、宮古、釜石、気仙では巡回診療を行っている「いわてこどもケアセンター」にも、全国医学部長病院長会議の被災地医療支援委員会のご高配を得て毎月全国から児童精神科医が派遣されています。

震災後の岩手のこころのケアには、このように全国からの支援が続けられており、県内の精神医療施設のスタッフとの協力関係による多目的なケアが提供されています。大災害後のこころのケアは中長期的に行われる必要があり、こうした協力関係を今後も維持していきたいと思っています。

岩手看護短期大学は平成2年の開学以来25年以上の歴史を持ち、これまで多くの優秀な看護師、保健師、助産師を養成してきた伝統ある大学です。本年4月より経営が学校法人岩手医科大学に移管され、来年4月に本学に設置される予定の看護学部の母体となることが決定しました。学長は本学の祖父江学長が兼ねることとなります。副学長としての私の役割は、祖父江学長の命を受け、学内の教職員の方々と力を合わせながら学生さんの勉学や生活を実りあるものにしていくと考えております。

本学は平成29年には創立120周年を迎え、看護学部設置が予定され、平成31年の矢巾新病院開院など、きわめて大事な時期にあります。このような時に新たな業務をいただいたということは非常に光栄なことであり、それだけに責任の重大さを感じています。今後、微力ながら岩手医科大学の発展に寄与できるように頑張りたいと思います。



中尊寺ハスが寄贈されました

1950(昭和25)年、奥州藤原氏四代の遺体学術調査において、足澤三之介初代放射線科教授が画像診断を行いました。

その際に作成したX線写真パネルを足澤三之介初代教授のご子息である足澤輝夫氏及び本学放射線医学講座が所蔵しておりました。昨年開催された第51回日本医学放射線学会秋季臨床大会において、同講座が当該パネルの展示の承諾を中尊寺に求めたところ、同寺に当該パネルが所蔵されていないことが分かり、移管の申し出がありました。

本学と足澤輝夫氏はこれを承諾し、パネルを奉納したところ、3月19日(土)に中尊寺本堂にて営まれた2代基衡命日の御月忌法要に先立ち、感謝状並びに中尊寺ハス1鉢の目録贈呈が行われました。



中尊寺 山田貫首より感謝状を贈呈される高橋企画部長



贈呈された感謝状



中尊寺ハス (開花時のイメージ)

4月15日(金)には、中尊寺の菅野澄円執事が本学矢巾キャンパスを訪問され、10株ほどの中尊寺ハスを届けられました。株の植栽は、ドミトリイ圭友館(学生寮)前の調整池にて行われ、順調に成育が進めば、例年6、7月頃に花を咲かせる見込みです。

このハスは、学術調査の際に第四代泰衡公の首桶から発見された80粒ほどの種から開花に成功した和蓮の一種で、花弁は淡い紅色、やや細身という特徴があります。



植栽作業の模様



設置された看板

エネルギーセンターの概要について

企画部施設課

この度、矢巾キャンパスC敷地（附属病院移転用地）において工事が進められておりましたエネルギーセンターが3月末をもって完成致しました。今回は、このエネルギーセンターの概要につきましてご報告致します。

■ 建物の概要

このエネルギーセンターは新病院建設予定地の北側に位置し、新病院で使用する電源及び冷暖房などの熱源を供給するほか、隣接するドクターヘリ基地や同一敷地内において工事が進められている岩手県立療育センター、となん支援学校に対して電源を供給します。

なお、本施設には職員用男女更衣室を併設しているほか、大規模災害などが発生した際には1階の会議室を近隣住民の避難所として提供する防災協定を矢巾町と締結しています。



全景（南西方向より）



2階女子職員更衣室



1階会議室

エネルギーセンター竣工セレモニーが行われました

4月12日（火）には、矢巾キャンパスC敷地内においてセレモニーを挙行之、岩手県、矢巾町、施工業者、本学関係者など約70名にご出席いただきました。

セレモニーでは、達増拓也 岩手県知事から祝辞（代読）を頂戴し、小川彰 理事長が施主挨拶を述べました。

その後、小川理事長、高橋昌造矢巾町長による記者会見が行われ、エネルギーセンターの概要や矢巾町と締結した災害時における避難所施設利用に関する協定について、発表を行いました。



関係者によるテープカット

設備の概要

エネルギーセンターを建設するにあたっては、東日本大震災のような大規模な災害等が発生し、外部からエネルギー供給が途絶した場合でも、新病院では支障なく医療体制を整えることが出来るよう、使用するエネルギーを1週間は供給可能な施設を整備する計画としています。

なお、今回導入した設備は、新エネルギー導入促進協議会の「スマートエネルギーシステム導入促進事業費補助金」を活用して整備され、地中熱利用設備や太陽光発電設備といった環境にやさしい再生可能エネルギーや、2種類のエネルギーを用いるコージェネレーションシステムなどを組合わせています。

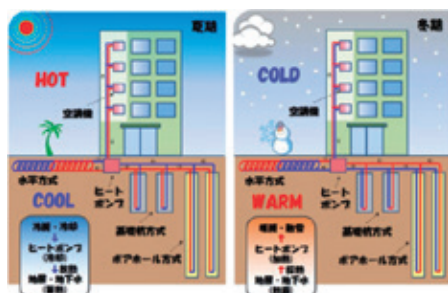
それでは、導入設備につきまして簡単にご紹介致します。

●地中熱利用設備

地中熱利用設備は、エネルギーセンターの基礎杭を利用した方式を導入しています。これは、基礎鋼管杭（杭径1200mm）に地中熱を採熱する管を併設し、熱を取得する方法です。

これにより取得した地中熱は、冷暖房熱源設備の熱交換用として使用します。

なお、この設備によって造られた熱源は、エネルギーセンター地下にある蓄熱槽に蓄熱し、病院などへ供給されます。



地中熱利用設備システム概要図



地中熱ヒートポンプ設備



熱搬送ポンプ

●太陽光発電設備

発電容量 10Kw の多結晶シリコン方式太陽光パネルを屋上に設置し発電しています。

この太陽光発電設備により発電した電力は蓄電池に蓄電し、補助電源として活用するほか、災害時には避難所として使用する会議室の照明用電源として供給します。



太陽光発電設備

●コージェネレーションシステム

平常時は電力負荷のピークカット用として運用するとともに、災害などによる停電時には非常用としても活用可能なコージェネレーションシステムを導入しました。

システムは、ガスエンジン（出力 700Kw）3台とディーゼルエンジン（出力 700Kw）2台を組合わせた台数制御方式で、エネルギー種の異なる機器を組合わけており、都市ガスもしくはA重油の供給が途絶した場合でも発電が可能であり、5台の発電機を様々に組み合わせて運転することが出来る制御方法を用いています。



ディーゼルコージェネレーション



ガスコージェネレーション

この他、停電の際に非常用電源としても活用が可能な電気自動車（昨年8月に導入済）と充放電設備、及び導入設備を効率的に運用するためのエネルギー管理システムも導入しています。



電気自動車充放電設備

以上、エネルギーセンターの概要につきまして簡単にご紹介させていただきましたが、これらの設備のほかに、新病院建設時には熱源設備であるボイラーや冷温水発生機、非常用発電機等が整備される予定です。

いよいよ今年度から新病院の建設工事が着工されますが、この一大事業を成功させるため、より一層のご協力を宜しくお願い致します。

平成27年度名誉教授称号授与式が行われました

4月1日(金)、創立60周年記念館10階会議室において、平成27年度名誉教授称号授与式が行われました。式では、小川理事長が名誉教授の称号を授与し、これまでの大学貢献に対して感謝の言葉を送りました。また、当日欠席の木村重信、前田正知両氏には、後日称号が授与されました。



木村重信名誉教授



前田正知名誉教授



後列左より

上原至雅名誉教授、北川隆之名誉教授、城茂治名誉教授、赤坂俊英名誉教授、加藤裕久名誉教授

前列左より

小林誠一郎名誉教授、祖父江学長、小川理事長、三浦副学長、酒井明夫名誉教授

平成28年度 入学式が行われました

4月8日(金)、岩手県民会館にて、岩手医科大学・岩手看護短期大学の合同入学式が行われました。岩手医科大学では、大学院医学研究科博士課程32名・修士課程4名、歯学研究科博士課程5名、薬学研究科博士課程2名、医学部123名・3年次編入学7名、歯学部47名・2年次編入学6名、薬学部130名の入学生を、岩手看護短期大学では、看護学科65名、専攻科地域看護学専攻22名、助産学専攻15名の入学生を迎えました。

また、岩手医科大学医療専門学校の入学式は、4月7日(木)に歯学部棟4階講堂で行われ、歯科技工学科13名、歯科衛生学科36名の入学生を迎えました。



入学生宣誓 (岩手医科大学)

3学部合同学生セミナーが行われました

4月9日(土) から2日間にわたり、雫石プリンスホテルにおいて、3学部合同学生セミナーが開催されました。

今年で5回目の開催となるこのセミナーでは医学部・歯学部・薬学部の6学年各20名が学部混成のグループに分かれ、1つの症例に対する病態・治療法・薬の処方について各学部の目線・立場で意見を出し合い、治療方針を検討しました。

平成26年度からは本学附属病院看護師協力のもと、術後クリニカルパスを作成しています。発表会では、教員も交えたディスカッションを行い、多職種が連携したチーム医療の意義について理解を深めました。



地域完結型医療ネットワーク会議が行われました

4月11日（月）、創立60周年記念館8階研修室において、地域完結型医療ネットワーク会議が開催され、盛岡近郊の14医療機関から医師、医療ソーシャルワーカー、看護師、事務員ら32名が出席しました。

この会議は、病院連携室間の情報共有並びにコミュニケーションの充実を目的として、このたび初めて開催されました。はじめに、森野地域医療連携センター長より開会の経緯、会の趣旨について挨拶があり、その後「今後の岩手医大の展開に関して」と題して、地域医療連携センター事務室の青木室長による講演がありました。後半のテーマディスカッションでは、「地域完結型医療を患者様により良く提供するために」というテーマのもと、医療機関の垣根を越えた熱のこもった話し合いが展開され、グループ代表者による発表が行われました。



青木地域医療連携センター事務室長による講演



テーマディスカッションの様子

薬学部白衣授与式が行われました

4月28日（木）、矢巾キャンパス大堀記念講堂において、薬学部5年生136名を対象とした白衣授与式が行われました。

授与式では、名取薬学部長と高橋実務実習部会長より、5月9日（月）から始まる実務実習にあたっての激励のことばがあり、保護者や教員が見守る中、学生へ白衣の授与が行われました。

また、5年生を代表して工藤 碧美さんより「建学の精神である誠の人間を目指すとともに、誠心誠意、実務実習に臨みます」と宣誓がありました。



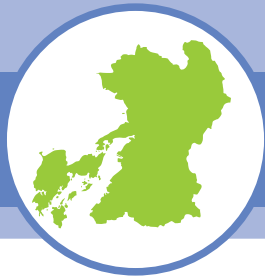
第1回肝臓病教室が行われました

4月28日（木）、東病棟2階研修室において肝臓病教室が開催され、外来患者さんやご家族ら約20名が出席しました。

この教室は、外来患者さん向けに生活・食事・服薬に関する指導を行うことを目的とし、月に1回、医師、薬剤師、看護師、管理栄養士が交代で講演を行います。

1回目の開催となる今回は、はじめに内科学講座消化器内科肝臓分野 滝川 康裕教授より教室開設の経緯等についてのご挨拶があり、その後「べっこ得する肝臓と食事のいい話」と題して、栄養部 俵 万里子 主任栄養士による講演が行われ、聴講した参加者からは多くの質問や相談が寄せられました。





熊本地震における災害支援活動

岩手医大 DMAT の活動

〔 DMAT : Disaster Medical Assistance Team 〕

期 間／平成 28 年 4 月 16 日（土）～ 18 日（月）

場 所／熊本県 南阿蘇地域

隊 員／【医 師】山田 裕彦（救急・災害医学講座 特任准教授）・大間々 真一（救急・災害医学講座 特任講師）

【看 護 師】佐々木 美里（救急センター 看護師）・金子 拓（救急センター 看護師）

【業務調整員】藤田 友嗣（救急・災害医学講座 助教）・藤原 弘之（災害医学講座 特命助教）

活 動 概 要

4 月 14 日 21 時 26 分の M6.5 の前震に始まり、16 日 1 時 25 分の M7.3 の本震による熊本県を中心とした地震災害に対して、16 日 16 時 03 分に DMAT 事務局より東北・北海道のチームに派遣要請があり、18 時航空自衛隊松島基地集合、19 時 C1 輸送機離陸予定で本学附属病院を出発した。

輸送機は福岡県築城基地に着陸し、その後自衛隊のマイクロバスで大分県竹田市の竹田医師会病院活動拠点本部に移動した。到着は 17 日 2 時半過ぎであった。その後ブリーフィングを行い 4 時過ぎに宿に到着し仮眠をとった。

17 日は 8 時より活動拠点本部でミーティングを行い、南阿蘇村災対本部のミーティングに参加した東北大学チームの報告を待って、活動拠点本部から車で約 1 時間半の南阿蘇村に山形県立中央病院チームとともに出発した。

南阿蘇村は停電・断水状態で、信号も使用不能になっている交差点が多く、土砂崩れで通行不能ヶ所も多く存在した。携帯電話はドコモのみがかるうじて通じる状況であった。南阿蘇村災対本部に挨拶後長陽地区の 3 ヶ所の避難所と 1 ヶ所の老健施設を訪れ情報収集した。避難所では夜間に人が集まってくるため就寝スペースがなく、車中泊や自衛隊のテントで宿泊する避難者が多

かった。また、トイレが不足しており衛生環境が悪い状況にあった。老健施設では倒壊危機の他の施設からの避難者 45 名を受け入れて 150 名近い入所者を 6 名のスタッフで対応しており、入所者搬出など早期の対応が必要であった。

18 日は 6 時に宿舎を出発し、8 時からの南阿蘇村災対本部のミーティングに参加した。地元の医療関係者や活動中の他機関との連携を図れるように、医療関係チームによるミーティングの開催を企画し、各機関の連絡先一覧を作成した。また、17 日と同様に避難所の情報収集にあたった。その他老健施設から入所者 15 名の搬出を行った。活動拠点本部は竹田医師会病院から阿蘇市の阿蘇医療センターに移動しており、阿蘇医療センターで 19 時に活動報告を行い、19 日以降南阿蘇村で活動するチームへの資料を作成し、活動を終了した。

19 日は、大分空港から羽田空港、東京駅から新幹線で盛岡に帰還した。

最後に、岩手県庁及び附属病院でバックアップしていただいたスタッフの皆様へ感謝申し上げるとともに、被災地の少しでも早い復興を願っております。

（文責：救急・災害医学講座 特任准教授 山田 裕彦）



福岡県築城基地に到着時のミーティング



活動拠点本部となった竹田医師会病院



南阿蘇村災対本部での打合せ

上記、熊本県・大分県での現地支援活動のほか、統括 DMAT である本学災害医学講座 眞瀬智彦教授を始め、災害時地域医療支援教育センター事務局 奥野史寛事務員と蒲澤優事務員が岩手県庁 DMAT 調整本部に入り、県内から派遣される DMAT の調整など後方支援活動を行いました。また、4 月 20 日からは眞瀬教授、奥野事務員も被災地入りし、熊本県庁対策本部等にて全国から派遣された DMAT や、医療救護班等の活動調整を行いました。

備蓄用飲料水の災害支援が行われました

矢巾キャンパスの災害時地域医療支援教育センターで管理する備蓄用飲料水 9,120 本（380 箱）を支援物資として全国フードバンク推進協議会に寄附しました。4 月 20 日（水）、事務職員らの手により約 5 t にもなる飲料水を鉄道コンテナに運び入れ、4 月 23 日（土）に福岡県の福岡物流センターに到着、その後、熊本県内各地に配布されました。



鉄道コンテナへの運搬作業



熊本県内での炊き出しの模様

いわて感染制御支援チーム (ICAT) の活動

2016年4月14日に発生した熊本地震に際し、医療安全管理部感染症対策室は、日本環境感染学会および岩手県からの要請を受け、岩手県保健福祉部所轄「いわて感染制御支援チーム*」を構成する感染制御専門班として緊急支援活動に参加した。

*いわて感染制御支援チーム (ICAT: Disaster Infection Control Assistance Team of Iwate)

期 間／平成28年4月22日(金)～25日(月) 場 所／熊本県(益城町・阿蘇地方)
隊 員／櫻井 滋 (医療安全管理部感染症対策室 室長・睡眠医療学科 教授)
小野寺 直人 (医療安全管理部感染症対策室・臨床検査医学講座 助教)

活 動 概 要

熊本地震後の避難所生活に伴う衛生環境悪化が見込まれることから、日本環境感染学会の先遣隊として東日本大震災の経験を有する本学職員が避難所を視察調査し、学会および現地の感染制御担当者に対し感染制御活動に関する情報を提供した。

避難所視察と同時に対策用衛生資材を届けるため、貨物車両(写真1)を運転して陸路熊本に向かった。22日(金)18時過ぎに東北自動車道盛岡南インターを出発し、23日(土)14時過ぎに九州自動車道基山SAに到達、学会賛助企業からの支援物資を受領して積載したのち緊急車両として通行止め箇所を通過し、17時過ぎに益城総合体育館避難所に到達、直ちに感染リスクの評価と衛生指導を実施した。同日は余震が頻発する中、市内郊外で車中泊し、24日(日)早朝に阿蘇地区に向かい、阿蘇医療センターに感染制御用資材を届けるとともに、近隣最大の避難所阿蘇中学校に展開する長崎県保健師チームと情報交換した。帰学予定時間が迫る中、熊本市保健所に熊本感染制御ネットワークの川口辰哉准教授を訪ね状況を報告した(写真2)。

同日16時に熊本を出発。25日(月)15時30分岩手県庁に帰着し、保健福祉部長および小川彰理事長に経緯を報告した。その後、提供情報に基づき環境感染学会が要請した隣県の感染制御チームが被災地に展開した。

(文責: 医療安全管理部感染症対策室 室長 櫻井 滋)



写真1



写真2

災害派遣精神医療チーム (DPAT) の活動

熊本地震による災害派遣精神医療チーム (Disaster Psychiatric Assistance Team: DPAT) の派遣要請が全国自治体に行われ、岩手県でも県内ではじめて精神医療チームの派遣を本学より行うこととなった。

期 間／平成28年4月27日(水)～5月4日(水)

場 所／熊本県御船保健所圏域の益城町及び甲佐町

隊 員／【医師】大塚 耕太郎 (リーダー、岩手 DPAT 統括医師、神経精神科学講座 教授)、遠藤 仁 (災害・地域精神医学講座 特命講師)、山家 健仁 (神経精神科学講座 助教)、【保健師】赤平 美津子 (災害・地域精神医学講座 特命助教)、【看護師】野村 慎 (看護部中3階精神科病棟)、【臨床心理士】中村 光 (災害・地域精神医学講座 特命助教)、【医療ソーシャルワーカー】玉川 聡子 (附属病院医療福祉相談室)、【業務調整員】小野 純平 (本学事務員)、熊谷 直記 (本学事務員)

活 動 概 要

4月27日に本学を新幹線を出発し、福岡県宮若市内を宿泊地とし、現地で調達した車両で熊本県の被災地との間を毎日往復した。4月28日に DPAT 調整本部でのミーティングを経て、4月29日から5月2日まで4日間にわたり、熊本県精神保健福祉センター内の活動拠点本部の指示のもと、熊本県御船保健所圏域の益城町及び甲佐町の避難所巡回に宮城 DPAT と一緒に従事した。毎朝夕に益城町保健福祉センターにて活動中の全支援チームによるミーティングが開催され、当チームも参加した。

現地では避難所巡回によりメンタルヘルス不調を抱えた避難者に対して、4日間で延べ79名の相談対応を行った。余震が続いており、熊本地震の被災者の抱える生活や健康面での困難さは深刻であり、車中泊をしている被災者も数多くいた。高齢者や精神障がい者などの対応が主体であったが、一方で子どものメンタルヘルス対策も重要で、小児精神科医が精力的に相談対応を行い、避難所となっている児童養護施設での親子向けの健康教育も実施した。5月3日に撤収作業を行い、5月4日日本隊が新幹線で本学へ帰着した。

今回の派遣に関し、派遣準備、スタッフの派遣、物資の準備など様々な形でお世話になった関係各位に感謝申し上げます。また、困難な状況におかれている被災者や地域の従事者の皆様に安心できる生活が訪れることを願っております。

(文責: 神経精神科学講座 教授 大塚 耕太郎)



現地での活動風景



親子向けの青空健康教育

学校法人岩手医科大学

平成28年度 事業計画

1. 背景と方針

本学は、創立者三田俊次郎が岩手県の医療の貧困を憂い、明治30（1897）年に私財を投じて設立した私立岩手病院に併設された医学講習所が起源であり、以来「岩手医学校」「岩手医学専門学校」「岩手医科大学」と姿を変え、百十有余年一貫して医療人の育成を続けてきた歴史ある大学である。この間、昭和40（1965）年には北東北・北海道初の歯学部、平成19（2007）年には薬学部を開設し、医療系総合大学の礎を築いてきた。

平成29（2017）年には創立120年の節目を迎えることから、創立者の掲げた厚生済民の原点に改めて回帰しつつ、新時代を担う誠の総合医療の実現と地方において世界に発信する大学への飛躍を目指す記念事業を実施することとした。第一段階として、平成28年度には、矢巾キャンパス新病院の平成31年度開設に向け、病院本体の建設工事を本格的に開始するほか、学校法人岩手女子奨学会から岩手看護短期大学の経営移管を受け、看護師の養成を開始する。平成29年度には、同短期大学を母体とした4年制看護学部を開設する予定であり、これにより医・歯・薬・看護の4学部の学生が同一キャンパスで学び、現代の医療の潮流とされるチーム医療の素地を涵養できる真の医療系総合大学として生まれ変わることになり、本学の更なる飛躍、発展が期待されることである。

創立120周年記念事業の推進のためには、大学ガバナンス体制を一層強化し、教職員が一体となって事業に

取り組むことはもとより、学生、卒業生、父兄、関係者、地域の方々の理解と協力が得られなければならない。したがって、これまで培ってきた信頼の歴史を改めて掘り起こすとともに、現在保有する知の力、医の力を積極的にアピールし、将来に向かって本学への支援拡大に努めるものとする。

一方、私立大学を取り巻く環境は、「2018年問題」と呼ばれる18歳人口の減少に伴う大学進学者の減少により、優秀な学生の確保が大きな課題となってくるが、本学としては、これまでの歴史に裏打ちされた実績と伝統を継承しつつ、社会の変化や需要、学生の資質に的確に対応し、本学の形態にふさわしい新たな特色と魅力の創出に向けた改革に取り組んで行くこととする。

また、当面の最優先事業である附属病院の移転整備においては、物価上昇や消費税増税、オリンピック関連事業に伴う建築費の高騰等も重なり、資金の確保は容易なものではない。帰属収入の6割以上を占める医療収入の積極的な増収策を推進する一方で、徹底した医療経費の節減に努めるとともに、各種補助金等、外部資金の積極的な獲得に努めつつ、借入金等、長期的な資金計画の検討を行いながら、使命とする教育・研究・医療を通じた社会貢献の永続的な遂行に向けて、財政基盤の強化を図ることとする。

以上の方針に基づき、平成28年度は次の重点事業を実施する。

2. 主要な事業計画

1 創立120周年記念事業関係

- ① 矢巾新病院建設に向けた附属病院移転事業の推進
- ② 内丸地区附属病院跡地活用に係る協議推進
- ③ 矢巾キャンパス緑化事業の推進
- ④ 創立120周年記念事業に係る総務広報・募金・史料整備
- ⑤ 看護学部の設置準備

2 教育・研究関係

- ①医師国家試験・歯科医師国家試験・薬剤師国家試験の合格率向上対策
- ②歯学部 Study Abroad Program
- ③医・歯・薬三学部の研究連携を推進
- ④「ひらめき☆ときめきサイエンス」による小・中・高校生を対象にした薬学の啓発
- ⑤内定率向上と就職先業種拡大のための継続的な支援
- ⑥全学部における教員養成推進事業
- ⑦教学 IR (Institutional Research: 学生情報一元化収集・解析) 充実化事業
- ⑧災害時地域医療支援教育センター事業
- ⑨医療専門学校の入学生の確保
- ⑩医療専門学校の国家試験合格率の高位維持

3 補助事業及び委託事業関係

- ①私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の推進
- ②私立学校施設整備費補助金による透過型電子顕微鏡の整備
- ③オーダーメイド医療の実現プログラム
- ④がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン
- ⑤災害時実践力強化事業
- ⑥岩手県こころのケアセンター運営事業
- ⑦いわてこどもケアセンター運営事業
- ⑧岩手県ドクターヘリ運航事業
- ⑨東北メディカル・メガバンク事業

4 医療関係

- ①積極的な増収策の実施
- ②医療経費の節減
- ③附属病院移転に向けた運営体制等の整備
- ④病院システムのリプレイス
- ⑤附属病院と PET・リニアックセンターの統合

5 管理運営関係

- ①高濃度 PCB を含む蛍光灯安定器廃棄処分計画

6 施設設備関係

- ①中・西病棟系統吸収式冷凍機更新工事
- ②外来トイレの改修工事
- ③矢巾キャンパス西講義実習棟 2 階講義室整備工事
- ④矢巾キャンパス図書館分館の図書落下防止対策
- ⑤矢巾キャンパス学生駐車場設備整備事業

※掲載内容は、平成 28 年度事業計画書を抜粋したものです。
詳細は平成 28 年度事業計画書及び本学ホームページ「情報公開」をご参照ください。

理事会報告 (3 月定例ー 3 月28日開催)

1. 平成27年度補正予算について
2. 第3号基本金(主税会学術研究基金)積立計画の変更について
3. 平成28年度事業計画について
4. 平成28年度予算について
5. 理事の職務担当区分について
6. 評議員の退任及び選任について
7. 役職者の選任について

教養教育センター長(新任) 松政 正俊
医歯薬総合研究所長(新任) 佐々木 真理
医学部副学部長(再任) 人見 次郎
医学部副学部長(新任) 小笠原 邦昭
薬学部副学部長(新任) 小澤 正吾
学生副部長(新任) 中島 理
健康管理センター長(新任) 石垣 泰

いわて東北メディカル・メガバンク機構機構長(新任) 佐々木 真理
いわて東北メディカル・メガバンク機構機構長(再任) 人見 次郎
いわて東北メディカル・メガバンク機構機構長(再任) 小笠原 邦昭
いわて東北メディカル・メガバンク機構機構長(再任) 中村 元行
任期 教養教育センター長については、平成28年4月1日から平成29年3月31日まで(1年間)、医歯薬総合研究所長、医学部副学部長、学生副部長、健康管理センター長、いわて東北メディカル・メガバンク機

構長及び副機構長については、平成28年4月1日から平成31年3月31日まで(3年間)、薬学部副学部長については、平成28年4月1日から平成30年3月31日まで(2年間)

8. 教員の人事について

神経精神科学講座 教授 大塚 耕太郎(前 同講座 講師)
産婦人科学講座 准教授 小山 理恵(前 同講座 特任准教授)
内科学講座神経内科・老年科分野 特任准教授 前田 哲也
(前 秋田県立脳血管研究センター 難病性脳疾患研究部長)
外科学講座 特任准教授 新田 浩幸(前 同講座 講師)
外科学講座 特任准教授 大塚 幸喜(前 同講座 講師)

発令年月日 平成28年4月1日

9. 岩手看護短期大学の諸規程の取扱について

10. 岩手看護短期大学の役職者の選任について

副学長(学科長並びに図書館長事務取扱) 酒井 明夫
看護学科主任 相馬 一二三
専攻科主任 鈴木 るり子

任期 副学長、看護学科主任については、平成28年4月1日から平成30年3月31日まで(2年間)、専攻科主任については、平成28年4月1日から平成31年3月31日まで(3年間)

12. 職員就業規則の一部改正について

13. 医学部学科設置、分野新設に伴う組織規程の一部改正について



感染症対策室 近藤 啓子 看護師長が 第31回日本環境感染学会学術集会で優秀演題賞を受賞しました

平成28年2月19日、20日に京都市で開催されました第31回日本環境感染学会学術集会上において、「MRSAクローン解析 (POT法) を活用したアウトブレイク制御の経験—入院制限困難なNICUの事例をとおして—」を発表し、優秀演題賞を受賞いたしました。この場をお借りして、臨床検査医学講座諏訪部章教授、小児科学講座千田勝一教授、NICU小館千公看護師長、感染症対策室長櫻井滋教授を始めとするご指導・ご協力いただいた多くのみなさまに感謝申し上げます。院内感染の制御は、infection control team (ICT) だけの力では実現せず、臨床現場の多職種職員の協力が不可欠です。今回、細菌検査室のご協力のもとでMRSA新規株についてPCR-based ORF Typing (POT法) を実施していただき、結果を客観的評価として臨床現場にフィードバックすることで感染制御の強化対策の協力を得て、MRSA多発事例を終息することができました。今後も実施した感染対策を客観的に評価・分析し、感染制御を推進していきたいと思います。



(文責：近藤 啓子)

周術期外来 島崎 由希子 主任看護師が 第46回日本看護学会学術集会で優秀発表賞を受賞しました

この度、第46回日本看護学会—急性期看護—学術集会 (愛媛県) において、優秀発表賞を受賞しました。演題は「小児心臓血管外科手術における後頭部褥瘡発生要因の分析」です。小児心臓血管外科手術において、手術後、後頭部に褥瘡が発生する症例が多く、褥瘡予防対策として、皮膚・排泄ケア認定看護師 (以下WOC) の指導のもと、マットレスの検討や体圧分散用具の変更、手術体位固定前後での後頭部の体圧測定、WOC・麻酔科医師とともに手術体位固定方法と手術中の後頭部体圧分散方法のシミュレーションを行いました。しかし、後頭部の褥瘡発生件数は減少せず、後頭部の褥瘡発生は、手術体位以外に心臓血管外科手術も要因に関係しているのではないかと考えましたので、心臓血管外科手術を受けた患児の後頭部褥瘡発生要因を分析することを目的とし、研究に取り組みました。研究からは、心疾患患児の低体重・身長、細胞組織や臓器など未発達な身体的特徴を捉え、褥瘡予防を検討する必要があるという結果が得られ、今後の褥瘡予防対策に活かしたいと考えております。受賞にあたり、多くの先生方やスタッフの皆様へ感謝申し上げます。



(文責：島崎 由希子)

小林 誠一郎 副学長が日本手外科学会功労賞を受賞しました

小林 誠一郎 副学長は、4月20日に広島市で開催された日本手外科学会総会にて学会功労賞を受賞されました。

この賞は、長年にわたり手の再建における皮弁移植や足趾移植、血管柄付き神経移植などを始めとする様々な業績を通じ、手の外科領域におけるマイクロサージャリーの進歩発展に寄与された功績に対し授与されたものです。

また、先生は平成9年から平成28年3月まで本学形成外科学講座を教授として主宰され、岩手県における形成外科医療の進歩・発展に大きく貢献され、多くの学会の理事などを歴任され、様々な教育・研究活動を通じ形成外科学の発展に寄与されました。形成外科学の一分野である手の外科に関しては、赴任以来、岩手県に切断指再接着が可能な施設の設置などの救急医療においても尽力され、複雑な手の先天異常に関しても多くの患者さんの治療に当たってこられました。



シリーズ 職場めぐり

No.100

産婦人科学講座

産婦人科は、腫瘍分野、周産期分野、生殖内分泌分野、女性医学分野という4分野からなります。

岩手医科大学の産婦人科学講座では、杉山主任教授のもと、菊池教授を中心とした周産期分野、板持教授を中心とした腫瘍分野におきましては、以前より総合周産期センターないしは腫瘍専門修練施設として特定機能病院の役割を担ってまいりましたが、生殖内分泌分野におきましても、この春より秋田大学から熊谷准教授を迎え、県の高度不妊センターとしての機能を充実させることが可能となりました。

また、女性医学分野につきましても、小山准教授を中心とした各グループの女性医師が交代で、思春期の患者さんにも安心して診察に来ていただけるような環境

の整備を行っており、今後も各分野、教育・診療・研究にバランスのとれた向上を目指したいと考えています。

(講師 千葉 淳美)



口腔保健育成学講座歯科矯正学分野

平成24年4月の歯学部改革にともなう講座再編により、口腔保健育成学講座歯科矯正学分野となりました。現在の医局員は、佐藤和朗教授をはじめとする教員9名、常任研究員6名、研究員5名、大学院3名の23名です。

診療では、永久歯の先天欠如や埋伏などの萌出異常を伴う難治症例患者や、骨格的なアンバランスや、先天性疾患に起因する不正咬合の治療を行うため、口腔外科や形成外科と協力して咬合の改善に努めています。また近年では中高年層の矯正治療を行うケースも増えてきており、審美的なニーズだけでなく、歯周病治療や補綴治療を含めた包括的歯科治療の一環としての矯正治療なども行っています。また、いびき歯ぎしり外来では、睡眠医療科と協力して、睡眠時無呼吸症候群の患者に対する処置や、歯ぎしりのためのスプリント療法などを行っています。

今後も診療・研究・学生教育を向上させるため、医局員一同精進してまいります。

(助教 水川 卓磨)



120th
NEWS

「創立120周年記念壁新聞」発行のお知らせ

本年4月より、創立120周年記念事業の一環として、広報媒体「壁新聞」の発行を開始しました。この媒体を通じて、来年に控える創立120周年に向け、本学が誇る歴史や記念事業のこれまで、そしてこれからの動向を逐次発信してまいりますので、記念すべき節目の年を一緒に盛り上げていきましょう。

壁新聞は、学内掲示のほか、記念事業特設サイトで公開しておりますので、是非ご覧ください。また、皆様からも取り上げて欲しい情報や、ご意見・ご感想をお待ちしております。メール又は電話等でお気軽にお寄せください。よろしくお願いいたします。

お問い合わせ先

●企画部 創立120周年記念事業事務局（内線：7022）

●E-mail：anniv@j.iwate-med.ac.jp

●特設サイト URL：http://iwate-med-120th.jp/



日差しが心地いい季節になりましたね。冬の間になまってしまった体をちょっと動かして、健康増進・体力増強のためにジョギングに出かけてみてはいかがでしょうか？

今回ご紹介するのは、明治橋から盛岡赤十字病院まで、北上川沿いの片道約4.5キロ、往復約9キロのコースです。

この区間の北上川右岸には自転車・歩行者専用のコースがあります。景色がよく、信号がなく、一本道で分かりやすい、とても気持ちよく走ることができるコースです。

明治橋のたもと（仙北町側）からスタートし、コースの最初には桜並木もあります。桜が舞い散る中を走れば春のを感じることができ、前半の区間は川沿いを走るの、川面の風を感じることもできます。

橋の下をくぐって南大橋を越えると、コースは堤防の上を走るコースになります。街並みよりもちょっと高いコースを走るのも気持ちよく、後半も走りやすい道がずっと続きます。休日にはコース脇の河川敷の少年野球や、高齢者の方のミニゴルフを眺めながら、賑やかな気分で行くことができます。

盛岡赤十字病院の脇を通って都南大橋のたもとに出れば、ここが今回の折り返し点で、スタートからここまで約4.5キロ。ひとまずお疲れさまでした。帰りも気持ちよく帰しましょう。帰りも走れば往復約9キロのコースです。

今回ご紹介したコースは、走りやすさという点でも気持ちよさという点でも盛岡屈指のコースだと思います。「ジョギングなんてしたことない」という方でも、ゆっくりゆっくり、歩くぐらいのスピードから始めても有酸素運動の効果がありますから、挑戦してみてはいかがでしょうか？ 新しい趣味ができるかもしれませんよ。



《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰	米澤 裕司
影山 雄太	山尾 寿子
松政 正俊	菊池 初子
齋野 朝幸	佐々木さき子
成田 欣弥	佐々木忠司
佐藤 仁	熊谷 佑子
藤本 康之	畠山 正充
白石 博久	菅原 侑子
藤澤 美穂	武藤千恵子
	高橋 慶

編集後記

ハナミズキの花がきれいに咲き、爽やかな風が心地よい季節になりました。ハナミズキは北アメリカが原産地で、1912年桜の木をアメリカに贈呈したお礼に日本に送られた由来があります。空にむかって咲く姿が凛として、個人的に好きな花で『返礼』という花言葉があります。熊本地震における災害支援活動報告を掲載しましたが、私達ができることは何か、考えていきたいと思っています。

（編集委員 山尾 寿子）

岩手医科大学報 第476号

発行年月日 平成28年5月31日
発行 学校法人岩手医科大学
編集委員長 小川 彰
編集 岩手医科大学報編集委員会
事務局 企画部 企画調整課
盛岡市内丸19-1
TEL. 019-651-5111（内線7023）
FAX. 019-624-1231
E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社
盛岡市本町通2-8-7
TEL. 019-623-4256
E-mail: office@kahoku-ipm.jp

スポット医学講座

眼科学講座 助教 橋爪 公平



黄斑疾患とその治療

目はカメラのような構造をしていて、フィルムに相当するのが網膜です。網膜には光を感じる視細胞があり、網膜の中心部（黄斑）に視細胞が密集しています。黄斑は視力に関わる重要な場所で、黄斑に生じる黄斑疾患は、視力低下、中心暗点（見たいところが見えない）、変視（物が歪んで見える）の症状を生じます。代表的な黄斑疾患は、加齢黄斑変性、黄斑円孔、黄斑前膜です。これらは加齢と共に増加する傾向にあります。

網膜の下には網膜色素上皮という一層の細胞があり、網膜色素上皮の下に老廃物が蓄積し、黄斑が障害される疾患が加齢黄斑変性（図1a）です。50歳以上の方に発症し、変視、中心暗点、そして視力低下の症状をきたします。萎縮型と滲出型の2つの種類があり、滲出型では異常な新生血管が網膜の下から生えてきて、出血や水漏れを起こし、進行性に網膜を障害します。滲出型加齢黄斑変性に対しては、新生血管を抑制する抗VEGF製剤の硝子体注射や光線力学療法という特殊なレーザー治療を行います。ともに外来でできる治療で、網膜

疾患外来では年間約1000件の硝子体注射を行っており、これは全国でも指折りの件数です。

黄斑円孔（図1b）は、黄斑に穴が生じる疾患です。眼内の硝子体というゼリーが中年以降に年齢的な変化で縮む際に黄斑に牽引がかかることが原因です。黄斑円孔は中心暗点、視力低下をきたします。黄斑前膜（図1c）は黄斑の前に線維状の膜が張る疾患です。その膜によって黄斑が変形すると、変視、視力低下をきたします。これらの疾患は硝子体手術で治療します。局所麻酔で約1時間の手術です。黄斑円孔はなるべく早期の、黄斑前膜は症状が進行する前の手術が望ましいとされています。当科では年間約200件の黄斑疾患に対する硝子体手術を行っております。

図2は中心暗点や歪み症状をチェックするチャートです。片目ずつ中心の黒点を御覧いただき、線が曲がって見える、あるいは見えない部分がある場合は、上記の黄斑疾患の存在が疑われます。是非一度試していただいて、もし該当する症状がある方は、眼科網膜疾患外来に御相談いただければと思います。

図1a

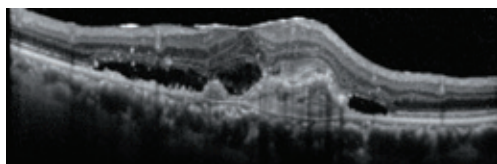


図1b

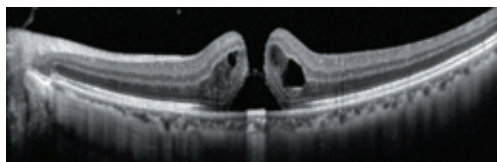


図1c

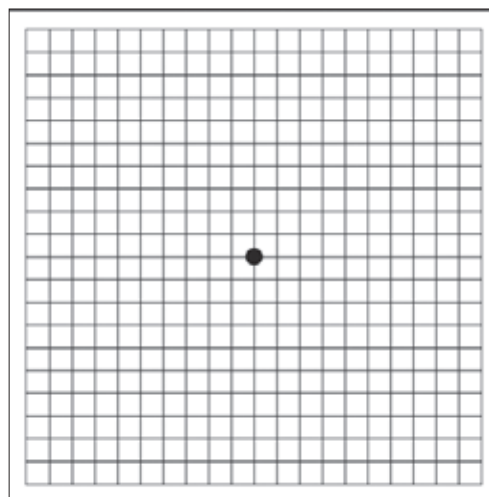
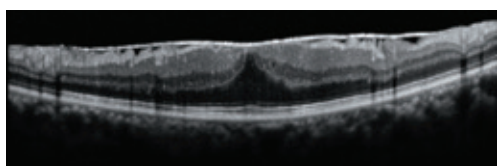


図2